

【解説】 外国語検定試験と外国語学習について思うこと**島田 雅晴 (人文社会科学部 現代文化・公共政策専攻 / 現代語・現代文化学系)****1. はじめに**

以前からそうではあったが、特に近年外国語検定試験への関心は高い。とりわけ英語関連の試験はよく知られており、日本実用英語検定協会(STEP)の英検(以降「STEP 英検」と表記)や TOEIC、TOFEL は誰でもその名を聞いたことがあるはずである。みなさんの中には実際に受験したことがある人もいるものと思う。そして、筑波大学に入学すると、あらたに「筑波英語検定」なるものを耳にすることになる。筑波大学ではしばしば STEP 英検、TOEIC、TOFEL などは筑波英語検定と区別され外部試験などともよばれるが、学生のみなさんにとってはわかりにくい面も多々あるかと思ひ、今回この場を借りて若干の説明を加えることとした。各検定試験の内容の相違もさることながら、筑波英語検定は必修科目である第 1 外国語の履修に事務的にも重要であるのでこの意味でも以降の説明を十分理解することが必要である。また、これら外国語検定試験受験も含めた広い意味での外国語学習のあり方について私見を述べることにする。

2. さまざまな外国語検定試験

外国語検定試験は特定の組織、団体によって主催、運営されている。例えば、筑波英語検定は筑波大学および筑波大学外国語センター、STEP 英検は財団法人日本英語検定協会、といった具合である。みなさんにとっては筑波大学が運営する筑波英語検定はあまり馴染みがないものと思う。そこで、まず、STEP 英検、TOEIC、TOFEL などの筑波大学以外が主催している、本学でいうところの外部試験を例にして話を進めていくことにする。

2.1. 外部試験

私は学生のみなさんから、今度英語関連の試験を受けようと思うのだが STEP 英検、TOEIC、TOFEL のどれを受験すればいいのか教えてほしい、というような質問を受けることがある。このような質問に際して私は必ず、何のために受験するのか、と問い返している。外国語検定試験にはこれまでに述べた STEP 英検、TOEIC、TOFEL にとどまらず多くの種類が存在する。さまざまな団体がさまざまな試験をお

こなっているわけである。同じ団体が複数の試験を管理、運営していることもある。まず最初に確認しておかなければならないことはそれぞれの試験にはそれぞれ独自の特徴、目的があるということである。試験はいうまでもなく受験者のもっている能力を一定の基準ではかるものである。しかし、単一の試験ですべての能力をはかることは不可能であるといつてよい。したがって、それぞれの試験はそれがはかる能力があらかじめ絞られていて、それをふまえて問題作成がなされているのである。

例えば、TOFEL は英語を母語としない人がアメリカの大学や大学院に留学するのに必要とされる英語力をもっているかをはかるテストとして知られている。英語の内容もゆえにアカデミックなものになっていることが多い。また、TOFEL は必ずしも日本語母語話者のみを想定して開発された試験とはいえない。アメリカに留学してくる全世界の人を対象にしているのであり、その中には当然日本語以外の言語が母語の人もいるのである。TOFEL を受験した私の知人が以前、とても簡単な文法問題が出題されていて一瞬奇妙に思ったがそのような問題はフランス語などのロマンス系の言語が母語の人にとっては難しいのだろう、というようなこといっていたことが思い出される。

一方、TOEIC は TOFEL とはその目的、成り立ちが異なっている。まず、TOEIC はもともと日本語母語話者用にその英語力をはかるために開発されたテストであるといわれている。しかも、留学してアカデミックな場面でというよりはむしろ企業活動の場面で英語を使用することを想定しているものといつてよい。日本の企業で英語の試験の受験を義務付けているところもあるようであるが、それが TOFEL ではなく TOEIC であることはこのような TOFEL と TOEIC の目的の相違を考えれば、当然のことと合点がいく。

このように各試験はそれぞれ目的が異なり、それぞれの特徴がある。先ほども述べたように外部試験は STEP 英検、TOEIC、TOFEL だけではない。書店の検定試験、資格試験のコーナーにいけば、ケンブリッジ英検、国連英検、工業英語や通訳技能に関する試験などさまざまなものがあることに気づく。私はこれ以上本稿で個々の試験の特徴について詳しく

述べるつもりはない。自分が何のために受験するのかを考え、その目的に見合った試験を自分で探してほしいと思う。もちろん、趣味で、力試しで、と多くの試験に挑戦するというスタンスもいいと思う。何れにしても自分で考えることが大切である。

ちなみに、STEP 英検、TOEIC、TOFEL である一定以上の級、点数を獲得すると筑波大学の必修科目である「英語」の単位が認定されることになっている。級、点数については外国語センターの作成した基準にもとづいて各学群・学類で独自に定められている。これについても興味のある人は自分で履修要覧や事務室で確認する必要がある。

2.2. 筑波英語検定

筑波英語検定は筑波大学でおこなわれている検定試験である。これも検定試験である限り目的がある。その目的とは筑波大学生にある一定レベル以上の英語力があることを保障することであるといわれている。筑波大学生は原則的に 1 年次に必修科目として英語を 4.5 単位(週 3 クラス)履修する。各クラスともそれぞれ 3 学期の終わりに総合判定がなされ成績が確定する。ところが、ここからが筑波大学がほかの大学と異なるところで、各クラスでの合格判定に加え、筑波英語検定で一定レベル以上の成績をおさめることが必修科目である 1 年次の第 1 外国語 4.5 単位の認定の条件となっているのである。それゆえ筑波英語検定は筑波大学卒業のためには必ず受検しなければいけない試験といえる。

ここで、筑波英語検定の実施形態について若干説明しておく。筑波英語検定は 2 月下旬に行われる。リスニング、リーディング、文法などの問題にマークシート方式で解答するのである。筑波英語検定の問題は非公開である。これは試験の精度を維持するために不可欠で、TOFEL なども同様の手法をとっている。結果は合格、不合格という形でだされる。不合格者は翌年度の 8 月に不合格者だけを対象にした筑波英語検定を受検できる。それでも不合格の場合はまた 2 月に 1 年生と一緒に筑波英語検定を受検することになる。筑波英語検定に合格しなければ必修科目である第 1 外国語を修得できず卒業することが不可能になるため、卒業予定年度中までには合格しておくことがのぞまれる。なお、筑波大学外国語センターでは不合格者を対象に 1 学期完結型の「英語」という 0.5 単位の科目を設定している。ここでは筑波英語検定に合格できるよう基礎的な英

語力の養成を目指している。

筑波英語検定に関して履修上さらに 2 点ほど確認しておかなければならないことがある。一つは 1 年生から 4 年生を対象にした「英語上級」というクラスの履修条件になっていることである。この科目は成績上位者を対象としたクラスで、1 年生であるならばプレースメントテスト、2 年生以上であるならば筑波英語検定で上位の成績をおさめたものに履修者を限定している。履修資格者は外国語センターの掲示板に掲示される。この科目は 1 年次であるならば「英語」、「英語 C」、「英語」のどれかに、2 年次以上であるならば「英語」に振替可能となる。また、2 年生から 4 年生のみを対象とした「英語上級」というクラスもあり、このクラスの履修条件にもなっている。このクラスは成績上位者を特に対象にしているのではなく、筑波英語検定合格者にひろく門戸を開いている科目でさらに英語を学習したい人を対象にしている。しかし、この科目は 1 年生から 4 年生を対象にした「英語上級」で認められていたような単位の振替は不可能であり、この点注意する必要がある。

筑波英語検定は筑波大学卒業に大きく関わる試験であるので、その内容的、事務的性質に十分注意して履修をすすめていくことが大切である。

3. 外国語学習についての私見

これまで外国語検定試験について説明してきたが、ここでは外国語学習について私なりの意見を述べてみたいと思う。彼は英検 1 級だから英語はペラペラだ、彼女は TOEIC で 860 点をとったのだから英語の達人にちがいない、TOFEL でこれくらいとれば英語をマスターしたといていい、などという発言をよく耳にする。これまで述べてきたように外国語のさまざまな能力をはかるためにさまざまな試験が存在するわけで、当然取得した級や点数はその人が持っている外国語能力の一面を示しているといえる。しかし、それはあくまでも一面である。外国語、あるいは外国語学習のすべてが検定試験の結果によって物語られるかのようなこの類の発言には言葉の表面にしか着目していないとても薄っぺらな言語観しか私にはみとれない。

そもそも「英語の達人」、「英語をマスター」ということが何を意味しているのか私にはわからない。私自身これまで自分が英語ができると思ったことなど一度もないし、学生時代教官からほめられたこともない。ただただ、できない、できない、といわれ続け、し

かも、勉強すればするほど自分がいかに何も知らないかということばかりが強く感じられるようになる。そして、このことは現在もまったく同じなのである。外国語ばかりではない。母語であってもそうである。これまで言語を研究してきたと感じたことは言葉というのは一般に考えられているのよりずっと奥深く、知的に興味深いものであるということである。私たちは自分の母語を何の不自由もなく使用できる。しかし、このことは決して私たちの母語が単純でつまらないものであるということの意味しているのではない。私たちの体は私たちの意志とは無関係に、そのしくみを知ることなく、生理的な営みを日々続けている。だからといって私たちの生理的しくみが単純でとるにたらないものというわけではない。このことは医学を専攻しているみなさんならよくわかりのはずである。普通ならば意識しない、しかし、簡単には解き明かせないしくみを明示的にすることが学問、科学がしていることである。学者はこのしくみを解明する作業においてなんともいえない知的興奮と快感を味わうのである。学者はそれがため学問を続けているようなものである。一見すると複雑で不可思議と思えるしくみも明示的に表した場合とても簡潔な形をとることが多く、なんとすっきりとみえるのだろうと感動するのである。

私にとって母語は日本語である。英語は私にとっては外国語であるが、もちろん、ある人にとっては母語である。外国語は母語とは異なり、いろいろなことを考え訓練しなければ使えない。つまり、外国語に接する場合は望むと望まざると背後にある言葉の複雑で不可思議なしくみを意識しなければならない。そしてこの複雑で不可思議なしくみという風景がその一部でも少しでもはっきり見えてきたりすると一種の快感を味わえるのである。これこそが学問をする際に味わう快感と同種のものであり、この点にこそ専門科目の履修に先んじて教養科目、基礎科目として外国語を学ぶ意味がある。外国語の学習を点数や単位をとるための無味乾燥な訓練とわりきり、参考書的な知識や自分の語学体験から得た知識をすべてとみなし、しかるべきスコアをあげれば自分をその言語の達人だと思いう頂天になり、なかなか成果が上がらなければ劣等感のうちに心を閉ざしてしまう、このような心持ちで外国語に向かっている学生諸子のなんと多いことか。私は残念でならない。広い視野に立って謙虚に言葉に向かえば、言葉の学習からすべての学問に共通する楽しさを誰でも体

験できるということをぜひとも覚えておいてほしい。

また、言葉を複数知ると相違点もさることながらそれらに類似点が多いことに驚かされる。英語と日本語はまったく違う言語である、というのはよく聞くことだが、じっくり観察してみると実際は英語と日本語の風景はとても似通っているのがわかる。表面だけを見ていたのではこのようなことに決して気づくことはなく、学問をする心で言葉に接してこそ見える風景なのである。このような風景が見えるとこれまで自分にとって異質であった異文化が妙に身近に感じられてしまう。表面的ではない、抽象的なレベルでの感動こそ人の心を豊かにするものだと私は思う。学問はそれを可能にしてくれるが、一番身近な言葉を通してこのような思考形態を身につけていってほしい。

筑波英語検定の時期になると学生の皆さんから合格するためにはどのような勉強をすればいいのかという質問を受ける。先に述べたように筑波英語検定は必修科目第1外国語の認定のための試験である。必修科目第1外国語は教養的、基礎的な色彩を帯びた共通科目である。無味乾燥な小道具としてではなく、それを通して学問の楽しさを味わうものとして外国語に接してきたのであれば、結果は自然とついてくるはずである。筑波英語検定のことを気にしすぎて本来あるべき姿を見失ってはならない。事務手続きにさえ十分注意していればそれでいいのである。みなさんの中には、医療科学専攻での研究や就職に関連する範囲での道具としての外国語能力が得られればいいので余分な努力はさせないでほしいと思っている人もいるだろう。私はこの考えにはまったく賛成できない。まずは何に使うための外国語かということは忘れて言葉に接してほしい。そして、諸学につながる知的興奮や言葉一般の奥深さを味わってから、それぞれの人が自分に必要な語学力を養ってほしい。この時になってはじめて留学や、企業活動、工業など、それぞれの分野に特化した語学内容を勉強すればいいのであり、いよいよ各種検定試験の利用のしどころになるのである。また、3年生、4年生になって専門分野の論文を英語で読んだりする訓練があればそれもそれぞれの分野に特化した外国語の学習というものにあたるであろう。このような順序、流れが基本であることに留意してさまざまな検定試験もチャンスをみて上手に利用して勉学を進めていってほしい。

4. おわりに

外国語検定試験の説明にはじまり、最後は私がみなさんにのぞむ外国語学習に際しての心構えを述べるところまできた。少しでもみなさんの知的生活に資すれば幸いである。皆さんの充実した大学生活を心より祈念する次第である。

最後に外国語センター長の安井泉教授が1年生向けに書かれた「外国語を学ぶということ」というリーフレットから次の一節を引用し、この小編を閉じることにする。

「学問の世界や勉強の世界では、「最小の効果のために最大の努力をする」ことが大切です。この世界で「最小の努力で最大の効果」という経済原則を当てはめると痛い目をみます。」